

## Ⅱ - 2 コルサコフ症候群の記憶リハビリテーション

—information items と source の学習によるグループセラピーの試み—

○若松 直樹<sup>1)</sup> 吉益 晴夫<sup>1)</sup>  
加藤元一郎<sup>2)</sup> 三村 将<sup>2)</sup>  
鹿島 晴雄<sup>3)</sup>

これまで我々はアルコール・コルサコフ症候群の患者に対して、記憶面の認知リハビリテーションを実施継続しているが、今回は information item と source の学習を課題としてリハビリテーションをおこなった。その結果について報告したい。訓練期間は平成7年10月から12月である。

【対象】 駒木野病院アルコール専門病棟に入院中の男性コルサコフ症候群患者5名。平均年齢：48.8歳。平均教育歴：13.3年。平均FIQ(WAIS-R)：86.2である。全例が断酒後最低半年は経過している。

【方法】 口頭の質問によって既知であることの確認された6人の有名人について、一つのエピソードとその回数からなる架空の情報(information item)を作成し、1人の患者に特定の1人の有名人の情報を配布する。患者一人づつが自分に与えられた情報を2度づつ読み上げ、他のメンバーに聞かせるようにする。個々の患者は自分に与えられた情報と、他のメンバーが読み上げた情報を記憶するように教示される。その時、情報と同時にその情報源(source)のメンバーが誰であるかをも併せて記憶するように指示する(メンバーが相互に氏名を記憶できていることはリハビリテーション中におこなっている見当識訓練によって確かめられている)。情報を相互に読み上げた後、干渉として他の訓練をおこない約50分後に情報とその情報源を再生させる。結

果の評価は情報内容の正答数および情報源の正答数でおこなった。なお、information item の正答は、架空のエピソードおよびその回数の両方が反応できて完全なもの(1点)としたが、エピソードまたは回数のいずれかが反応できた場合には0.5点を与えた。

【結果】 information の学習についてはそれが訓練の経過にそって上昇する群としない群に分かれた。source の学習についてはlinearに上昇しplateauに達した一例と学習の不安定な群に分かれた。神経心理学的検査との比較では、WAIS-Rでは著明な差はみられないが、information item および source の正答が良好な一例ではWCSTのカテゴリ達成数およびWMS-Rの視覚的記憶が他の例に比して良好であった。

【考察】 訓練全体をとおして最も目立った点は、患者にとって課題が困難ではあっても意欲的に取り組む姿勢が観察されたことである。これは、とかく単調になりやすい記憶訓練の中で、今回の課題がより現実場面に類似した設定であったためと思われる。また、このため自らの記憶障害の認識の促進にも有効と思われた。神経心理学的能力との関連については、従来指摘されているように、source amnesia と前頭葉機能障害との関連が示唆された。また、今回のような訓練の条件設定下では、source の学習に人物の視覚的記憶や着席の position の記憶が関連することが示唆された。

1) 駒木野病院  
2) 東京歯科大学市川総合病院精神神経科  
3) 慶應義塾大学医学部精神神経科